

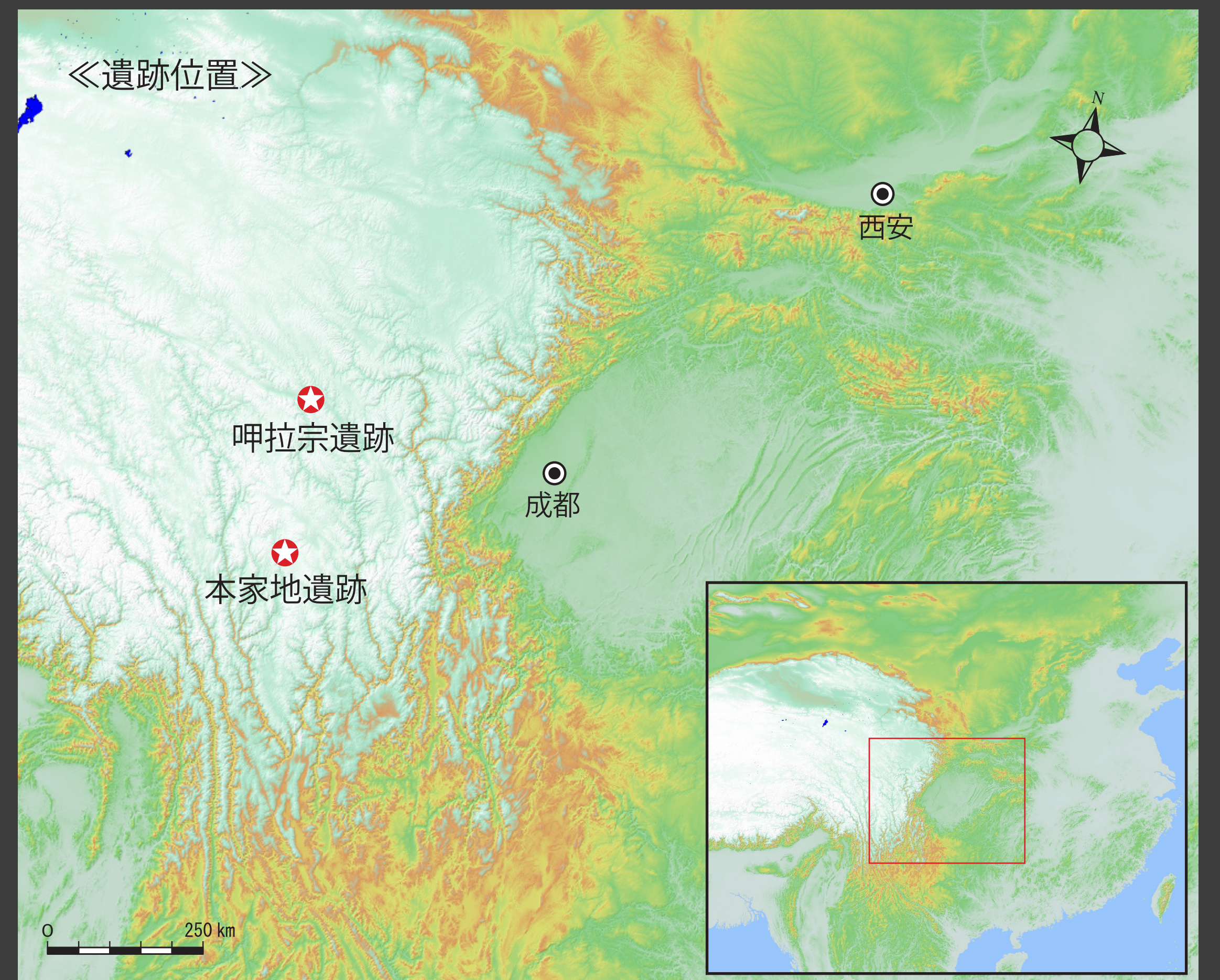
吐蕃の動物犠牲

宮本一夫¹・高大倫²・唐飛²・陳偉東²・○菊地大樹³

(1. 九州大学大学院人文学部 2. 四川省文物考古研究院 3. 奈良文化財研究所)

はじめに

九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室と四川省文物考古研究院は、「西南地区北方系青銅器および石棺葬研究」という研究課題に基づき、2008 年～2010 年の 3 年間にわたり、共同発掘調査をおこなった。そのなかで、四川省甘孜チベット自治州炉霍県呷拉宗遺跡と同省雅江県本家地遺跡において、およそ 7 世紀から 9 世紀に、現在の四川省から西藏(チベット)自治区をまたぐ、川蔵高原一帯を支配していた吐蕃の遺構を検出した。それは、呷拉宗遺跡では吐蕃成立期の製鉄遺構、本家地遺跡では終末期にあたる住居址であり、そこから大量の動物骨が出土した。吐蕃の人々がどのように動物を利用していたのかについては、これまで文献をもちいた歴史学を中心に研究がすすめられてきたが、遺跡出土動物骨の分析報告が乏しいこともあり、ほとんど具体像があきらかとなっていない。そのため本発表では、実際に出土した動物骨の分析をとおして、その一端を明らかにすることをこころみる。



壹. 呷拉宗遺跡製鉄遺構

呷拉宗遺跡は、四川省甘孜チベット自治州炉霍県仁達郷呷拉宗村をながれる鮮水河左岸の緩やかな斜面に位置する。紀元前 7～6 世紀の石棺墓群と、およそ 6 世紀の吐蕃成立段階における製鉄遺構 (2009LGY1) が検出され、2 個体の人骨とともに多数の動物骨が出土した。総破片点数は 550 点、そのうち同定可能なものは 45 点にとどまり、キジ科、イヌ科、ウシ属、ヒツジ属であった。人骨・動物骨ともに被熱した痕跡がなかったことから、廃炉後に葬られたと考えられる。そのうち人骨 1 体には、手が後ろで縛られた状態で葬られており、その周辺には、ウシやヒツジが破片の状態で散乱していた。これらは、四肢骨の骨端部や頭蓋骨の縫合が癒合しておらず、臼歯も萌出段階であることから幼獣である。また、出土した部位が前肢に集中しており、下肢にあたる部位が含まれていないことが、特徴として挙げられる。



↑ 犬歯にみられるエナメル質減形成



← 本家地遺跡 4 号住居址出土サル下顎骨

貳. 本家地遺跡 4 号住居址

本家地遺跡は、四川省甘孜チベット自治州雅江県の谷間を流れる雅魯江西南の斜面に位置する。発掘調査では、T1 から T6 まで 6 箇所の特レンチが掘られ、そのうち T3 からは、吐蕃の終末期にあたりと考えられる住居址が検出された。住居址とその周辺から出土した動物骨の総破片点数は 117 点、そのうち同定可能なものは 11 点にとどまり、ウシ科、ヒツジ属のほか、サル(オナガザル科)が出土した。なかでも特徴的なのは、サルの下顎骨である。下顎骨は、住居の柱穴付近から左右 1 点ずつ出土しており、第三後臼歯 (M3) が萌出段階であることから、幼獣から若齢であると推定される。また、左右の犬歯にエナメル質減形成とおもわれる変異が確認された。

おわりに

呷拉宗遺跡の製鉄炉からは、ウシ、ヒツジの幼獣にくわえ、イヌ科とキジ科が奉げられていた。このような動物供犠組成は、吐蕃早期の昂仁県卡嘎郷布馬村遺跡など、吐蕃中心地と考えられる地域にも同様にみられるものである。遺構の性格を検証する必要はあるが、犠牲として奉げられたと考えられることから、吐蕃の動物供犠体系を考えるうえでも注目すべき例となる。本家地遺跡では、住居址からサルの下顎骨が発見された。サルを犠牲とすることは『旧唐書』、『新唐書』卷一百九十六上「吐蕃上」にその記述がみられる。また、吐蕃にはサルを祖先とする猴祖神話が伝承されていることが知られている。柱穴付近に下顎骨のみ出土しており、他の部位がみられないことから、住居の柱に掛けられていた可能性もあり、このサルが何らかの信仰的な要素として機能していたとも考えられよう。このように本資料は、これまで文献や神話でしか知ることができなかった、吐蕃人と動物とのかわりについて、具体的な検証を可能にする貴重な一例となる。

